

春がおら位もさ度出目



名月をとつてくれるとなく子哉
瘦がへるまけるな一茶是に有
我と来て遊べや親のない雀
やれ打つな蠅が手をすり足をする
雀の子そこのけそこのけ御馬が通る
是がまあつひの栖か雪五尺
夕月や流れ残りのきりぎりす

宝暦十三年(一七六三)、信州柏原生まれの俳人小林一茶は、義母と異母弟との折り合いが悪く、十五歳で江戸に奉公に出され、困苦と戦いながら俳諧の道に専念した。その一茶を支援してくれたのは房総の俳人たちで、流山、守谷などに足を踏み入れている。とくに、流山のみりん醸造の秋元双樹のもとへは五十四回も来ており、その二人の交流を記念した一茶双樹記念館ができています。柏の布施弁天も訪れていて、それぞれ句碑がたてられています。

写真左は、布施弁天近くのあけぼの公園にある句碑、それを詠んだときの俳文も書かれています。句は「米蒔くも罪ぞよ鶏がけあふぞよ」。鶏があとを追ってくるので米一合を買い、それをまいた。鶏がそれを食べているうちに弁天様に行こうとしたのだが、鶏たちはわれがちに争いケンカを始めた。その間、鳩や雀が来てついでに、鶏たちが戻ってくると、パツと逃げるが、いつまでもケンカしていればいいのと思っているだろう。人間も同じだな。

写真右下は一茶双樹記念館の隣の光明院にある連句碑。双樹が「豆引きや跡は月夜に託す也」といえば一茶が「けぶらぬ家もうそ寒くして」と応じている。豆の引っこ抜きで疲れたよ、あとはお月さんにお任せしよう、夕餉の支度でけぶっている家もけぶらない家もあるが、秋の夕暮れ、寒いなあ。

写真右上は流山市役所にある句碑。「ゆうぜんとして山を見る蛙哉」

さて、上掲の句は俳文集「おらが春」の巻頭にあり、「ことしの春もあなた任せになんむかへける」といい「目出度さもちう位もおらが春」と詠む。あなた任せとは、南無阿弥陀仏の他力本願である。このとき五十二歳、齒は抜け、白髪頭ながら二十八歳の若妻を迎え、生活に満足を見せるが、生まれた子三人も、妻までも死ぬという悲運に見舞われる。

動物や植物にまで声をかけ、芭蕉、蕪村とはまったく違った庶民性、土着性を詠み込み、親しめるものがある。しかし、義母弟との遺産相続争いには執念深さを発揮したし、奇人ともいわれている。

